女學雜誌

第二百五十五號
明治二十四年三月七日發兌

勝海舟伯を訪ふ
宮中女官　中島俊子
日本は女子國なり
婚姻愛情　方寸子
女學雜誌は飽叔

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 255. MARCH, 7TH. 1891.

EDITORIAL: On Colonization.
WORDS AND DEEDS:
MISCELLANEOUS:— Treating on the Chinese Literature. (Concluded) (Tenchishi) About Court Ladies (Nakashima Yoshiko). A mirror which showed One's future wife. (Kozansei) An interview with Count Katsu. (Oino Fumiko)
NOVEL:— "Fuunkio." (Unposhi)
PHYSIC:— A talk about Telephony. (Yoshida Shinko)
HOUSEHOLD SCIENCES;—Domestic service. (part I.) (Yukiko) How to make a nurse love the baby. (mother)
HUMOUROUS:—
"The Talented Hawk" (Fumiko).
CRITICAL NOTES:—Various kinds of writing the Rhyme. (Concluded) (Unposhi)
CHILDREN'S COLUMNS:— "A Deer and the Grass" (Yumiko).
CONTRIBUTED ARTICLES: The "Woman's magazine" is like "Hoshiku." (A. B. C.) Only One Manifesto! what merit dose it? (Kawai Shinsui.)
NOTES AND NEWS. OF THE LATEST ISSUE
QUESTIONS AND ANSWERS.
CORRESPONDENCIES.
CONCERNING WOMEN.
WEEKLY REPORTS.
THE PRICES OF CERTAIN ARTICLES.

第二百五十五號目次

社說　言行　雜錄　小說　理學　家政　笑草　批評　見鑑　隨感　寄書　時事　問答　通信　女報　週報　物價

殖民論○日本は女子國なり
漢學辨下(天知子)○宮中女官論(中島俊子)○緣の姿見(鴻山生)○氷川伯を訪ふ(生野ふみ子)
浮雲胸第六回(雲峯子)
電話交換のはなし(吉田伸子)
ホーム議案二(ゆき子)○保姆をして兒を愛せしむる方(母)
希有の術(ふみ子)○能ある鷹(仝)
幾多の韻文論下(雲峯子)
草と鹿の話し(ふみ子)
婚姻箴(愛山生に次す)(方寸子)
女學雜誌は飽叔の如し(A.B.C.)○一片の檄文何の効かある(川合信水)

女學生　第拾號＝廿六日よ發兌せり
當號には『女子教育の感を述べ』併せて宣教師各校長に告白す』といふ痛快の文あり
當號には『新年の祝節』といふ艶麗の筆あり
當號には『唐詩選の講義』を掲げ始めたり
當號には『熱海に杖を曳く』といふ時節柄面白き紀行あり
當號には『淸風大人の和歌點删』を掲げたり
此他愉快なる詩文及ひ女學生諸子の秀麗愛すべき文甚だ多し

女學雜誌社

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ百巻をば僅に一圓五十錢にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生する分八十冊にて金一圓の割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買入を要する義にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮妻の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信」。「幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰死」。「大島圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子教育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の巻」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税六錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し
歌留多遊びに宜し
遺物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第二百五十五號　明治二十四年三月七日發兌

社説

殖民論

（上）日本は女子國なり

支那人が日本國を評するときは、君子國なりと云ひ、西洋人が評するときは、美術國なりと云ふよし。吾人は之あるを以ての故に、日本は女子國なりと云はんと欲す。夫れ、武力、智力の專ら流行する時節に於ては、女子は到底男子の后へに立たずんばあらず。左れど、道德、美術の主として行はるる時勢となれば、男子は到底女性に及ぶべくもあらず。識者皆な云はく、女子は道德をもつて生れ、美術を以て動くと。其言行即はち是れ一篇の道德經にして、其聲音起臥藹然として美に協はずと云ふとなし。故に君子の國は即はち女子の國にして、女子尤とも勢力を得べき地なり。美術の國とは即はち亦た女子の國と云ふに均しく、女性が長所、尤とも多く行はる可きの境界なり。左れば、吾人は、日本を稱して女子國と云はんと欲す。而して、日本を擧げて万國の間に掛け、其の旭日の旗章を、千翩万翻の中間に輝やかさんには、日本の道德を發揚するヿと、日本の美術を助長するヿとの外に、其き策の存せざるヿを思ふ。之を以て、日本は他より稱呼せらるるの上に付き、實は女子國たるのみならず、眞とに女子國の實を顯昭するを以て、その立國盛隆の方針と爲さずんばある可からず。

更らに深く日本國事物の眞相を觀破すれば、日本の山川風土物產は、大率ね皆な女子的の趣きを存するヿを覺る。日本は實に女子國なり。先づ其地形を見よ、山多くして野狹まく、谷深くして、畠小さし、今后何如に田制を改ためたりとも、內地に居て大農の策を施こし行はんヿ殆んど望みなきに似たり。日本大躰の耕地は、大凡そ園圃に類す、未だ之を以て其の田畠とし見做すヿ能はざるなり。故に吾人は十年前の農業雜誌に於て、日本の農業はガーデニングなり、ガーデニングを譯して直ちに園藝とは云ふ可らずと論ろひしこともありぬ。要するに、我國の耕作は米國の園藝に均し。西洋人、日本の風光を總稱して花園の如しと云へど、風光の眞に花園たるの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

みにあらず、四方の田野亦皆な園圃たるに過ぎざる心地す。而して園藝は男子の業にあらずして女子の職たるに適す、數町反の麥を苅り稲を種るは固より女子のみの手にて辨ずるに餘りあり、况んや此所にて野菜、草花、果木を作り、もしくは蜜蜂を飼ひ、鷄を畜なふの類ひ、殊に女業たるに適するものにあらぬは無し。

又、山林は日本國最大の天産なり、今の人々こせ〱したる經濟に注意して、未だ深く此の大財源に心を寄せず、邦家の爲めに頗ぶる惜しむべきものある也。第一回の帝國議會は遂に其議案に着手せずして止みぬ。然れども來らん年は必らず之に向つて大經綸を議し、深く此の天與至大の財源に意を注ぐべきなり。扨て、いよ〱山林に信切なる政略を施こし、四方の禿山に、鬱々たる樹林を茂らせ、毎年甘く輪伐して、歳々夥多の木材を伐採することゝ爲らば、吾人はそれ此の木材を如何に使用すべき乎。印度支那に向つて輸出するの道存せざるにあらねど、此后永遠の大販路なりとも思ほへず。之を西洋各國に向つて賣出すべき見込ありやと云ふに、望み至つて少なし。一説に西洋の家屋も今后は追々木材建築に改進すべしと云ふものもありと云へど、此は殆んど痴人が夢物語するに似たり。然らば日本面積の三分の二を占る山々に、今后樹木鬱々として茂生したるの曉き、抑そも如何にして其材を高賣すべきかと云ふに、即はち日本人固有の手藝を之に施こし、材を製してさま〲の器具什器珍弄品なんどを作り、量を小さくして價を高くし、綿密なる手工を加へたるの故を以て、多く益利を收むるの工夫第一と云ふべし、而して此手藝に適するものは到底女性ならずんばあらず。豈たゞ、之のみならんや、山林の監護も實は女子に適す、之に椎茸を作り、もしくは其邊りに人造魚を養ふのたぐひ、其他様々の山林副産物を收納するの方、一として女子に尤適せざるものはあらず。

又た、竹は日本國の大ひなる財産なり、世人亦た之を利用することを忘るゝに似たり、もし之に細工を施こして天下に輸出せば、天下永久に之に敵するものなけん、而して其の細工の業は男子到底女子に及ばじ。

又、楮の事を言はざるを得ず、玆に西洋紙と日本紙とを比較せば、誰ありてか、日本紙の、強くして固く、廉にして保存に便なるの利を思はざらん、今后一層其製法を改良し、紙質

を滑らかにして、西洋帋固有の美質をも併せ供へしむるに至らば、思ふに、日本帋は万國に大販路を開くに至らん。而して、其の料格にして、格は他の國に極めて少なし、之を帋に製するの方に至りては、女子の職業として、特に尤も適するもの也。

此他日本の特有物として、万國に比類なきもの四つ、曰く、茶、生糸、漆器、陶器。この四つの者は、男子の業と云はんより、寧しろ女子に專適するものと云ひて可なり。たゞ、古來の習慣によりて、男子主に之に從事し、女子を用ゆること多からずと云へども、細かに其業の性質を察するものは、誰れか之を以て女子の本業にあらずとせん。

もし如此く列擧し來れば、殆んど際限なきことを覺ゆ。抑そも以上のもろ／＼の職業は、男子の業と云はんよりは、寧しろ、女子の業と云ふべし、其規模の小さくして、綿密を要するとの大ひなる、力量を用ふるとの甚はだ僅かにして、美術上の性格を尤も多く入用とすると、皆是れ男子の短所とするものにして、女子が天然に長所とする所ろのもの也。本來稱して之を女子の職業と云ふべき也。

豈たゞ之のみならんや、日本現時に行わるゝ所ろの總べての職業は、大抵當に女子の任ずべきものにして、丈夫男子が柔々として屈托すべきものにはあらず。然るに、日本の國、人口度外に多くして、賃金の格、例外に低きく、人々の收金至つて少きがゆへに、男子も亦老廢病者の輩らが當に任ずべきほどの些々たる仕事に有つき、之を以て辛ふじて口を糊するの躰なり。吾人市を歩み、堂々たる偉丈夫が、金を叩いて、飴を賣り、餅を製して、小供のおもちやとし、日々僅かに三四錢の利を得て、六尺男子の本業となす情况を見、未だ曾て慨然長歎せずんばあらず。夫れ日本現今の職業は大率婦女子半病人などの專ぱら任ずべき仕事なり、虎を搏ち、波濤を凌ぐの勇者が、全力を皷して敢爲剛行すべきほどの業務にはあらざる也。然に習慣性となり、日本の男子は多く此やさしき仕事にのみ適合し、遂に剛壯勇偉の大事業に向つて眼を放たず、力量自から枯槁し、男性久しうして失なんとす。此を以て、日本人の米國に渡り、業務を執るもの、賃銀を聞に、彼等は、彼國に於ける婦人の仕事にのみ着手することを得れど、到底その堂々豪々たる、大男子の業務を執ることを能わずと云

三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

へり。何んぞ痛ましきとの甚しきや。

然れども是れ日本人の天性に非ず。もし習慣を打破して男性の自然に復すれば、日本男子必らずしも偉大勇壯の業務に適せざるにあらず。そは暫らく措く、情勢如此きの故を以て、日本現今の百般工藝は、男子化して女性となり、自ら力を減じて敢て女性の仕事にのみ着手するの結果たり。もし活眼を開きて一瞥せば、日本目今の總ての工藝は、大抵女性の本職とすべきものにあらぬはあらし。

吾人は、男子が、女性の仕事を奪ひ居るとを責むるにはあらず、たゞ之によりて女性が其本職を失ふことを歎き、男子も亦た其の力らの半ばを放棄するとを歎き、邦家の大經濟の爲に深く之を惜しむもの也。夫れ何ものゝ損と云へども惜しからぬはあらし、然れども人を損するより惜しきとの大ひなるはあらず。今ま、日本の男子は工藝上半ば其力を消失し、日本の女子は殆んど其の全量を失なふ。即はち日本の男子は半ば遊び、女子は全く遊ぶ。語を換て言はゞ、日本男子は半ば死し、女子は全く死せるに均し。概するに日本の人口は、工藝上一千万人あるのみ、決して四千万人ありと云ふと勿れ。

吾人深く之を悲しむ。如何にして、之を救はんか、たゞ有り、殖民の政略を執る即はち之のみ、日本人多く他に移住して、内地の人口半ば減じ、男子尤とも多く去つて、女子の領地同比例を以て増加し、內地目今の工藝に對し、女子をして就て手を着くるの餘地あらしむべき也已。

吾人が殖民政略を贊成するの理由極めて多し、以上を其の第一となす。

言行

○此頃ろ世に名高き、ゼ子ラル、ブースが新著、最黑英國の開卷第一葉に明記して云はく、余は、此書を、殆んど四十年に近き間のわが同作者、相談相手、事業の仲間たり、又た、人類の幸福を希圖するわが總ての志望を共に分ちたる人、即はち、わが、愛する、信實なる、熱着せる、夫人に、此書を獻ぐと。

○孃が答　ブロウニン夫人の詩に、昨宵は然りと諾し、今朝は否と答ふ、燭火にて見し色は、日の光にて同じからず。

わが仕事　しのぶ

事業の粹は、人を善くし、兼て我を善ならしむるにあり。事業を成すと云ひて、人に惡感化を與へ、我に善からぬ心を生ぜば、實は事業を破りたる也。われ、久しく此の念ひを懷く、以て事業を成就するの精神となす。引て思ふに、左らば、眞の事業の功徳は、年の久しきを以て大なるにあらず、わが心の聖にして潔ぎよきとの指すを以て大ひなりとす。たとひ朝たに道を得、夕べに死すとも、一寸時間に於ける清き靈の感化は、十年の穢れる事業よりは効あらんと。スコット、死に瀕して、「君よ善なれ」と遺言す。一言は、數十卷の彼が著書よりも事業を爲しぬ。何となれば、其言は聖絕にして靈の生命あり、數十卷の書も之に及ばざりければ也。ユダが一生は、クリストの三年よりは短かく、盜跖が語は、柳下惠の夭よりも夭なり。われ驢馬の如く、脊に重きを負ふて汗にあへぐ、日々勉めたりと云ふと雖ども、之を以て事業を爲すと云ふと能わず。わが身靈の樓閣果して成就しつゝありや。わが生命ある事業果して進步しつゝありや。密かに祈り、謹しみて省み、恐れて伏す。

雜錄

漢學辨（下）　星野天知

迂遠文字

勤めて難字を誇りげに用ひたるは、羅甸文字、源氏文字を得く色氣に列べたる希臘學者和學通者の餘弊と同じ、シェクスピアがホラシヲの禁語に言ふ如く "They aim at it. and botch the words up fit to their own thoughts" 彼等は當推了もて自己の考へに當箝め、其言葉を措くも綴合するなりと、此語實に當れり、豈特に漢字のみならんや。その白髮三千丈の庭大文字の如きも、基督が所謂七十度せよの如き、又英文中百千萬などの文字を多數と言ふ意味に用ゆるが如く、猶八百萬の神と言ふが如く、數學的に言はざる所は英も和も同じ、豈獨り漢字のみならんや、況んや文字の修飾と律韻との趣味よりきたる、一辭に過ぎざるをや、共に漢學を傷くるに足らじ。然るに又一時迂遠文字なりとの非難聽えたり、是れ其故を知らず、思ふに實用學に適しと言ふの意か、百工科學は固より泰西學に及ぶ可らず、文學の思想是亦同じ、然れども當時人々は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

經、文、史書等のみを學問と心得居りし所へ、俄かに百工科學の學問を見たる故に、之れを混同して實用學に遠しと感じたるなるべし、斯れば敢へて論ずべくも非ず、迂遠なりと言ふの非難は容易に取去る事を得るなり。以上の三弊は漢學を斅ゆる者と學ぶ者の、心得て避く可き所なりとす。

陳洪謨曰へらく、文脉は幹なり、文意は帥なり、文氣は翼なり、文辭は華なりと。漢學の非難者は此文辭の點にありて而して文辭の華を見ず、漢學に無注意ある者は此文脉にありて而して未だ文意文氣を見る者少なし、文意の洪浩たる大潮流あるを見ず、文氣躍々として大空飛過するものあるを知らず。今假りに英學は悉く漢學より超越したるものと定むるも、其英學を日本的に發達せしめんとするには、勢ひ漢學を發達せしめずんばあらず、何となれば日本國は未だ英文字流通の時代に非れば、其學の思想を發表するには大に翻譯の力を完全せしむるより急なるはなし。翻譯の術は到底和文學の適任とするを得ず、和文學者いかに奮慨するも其學の思想と其文字發達の妙に至りては、極めて及ぶ可くも非ざるなり。

嘗て予四書五經を通讀し何の感情もあらず、唯崎嶇山路を歩む心地す、則ち書を投じて嘆ず、噫迂遠無用字哉。更に諸子大家の文集を誦讀して又何の妙なし、老莊を讀むに及んで又叱すらく、無稽の囈語是れ半錢文字のみと。爾來年を重ね、稍々聱牙文字、龜甲文字の一斑を窺ふに當り、文想少しく開けて其趣味界に入込むや否、宇宙を濶歩し雲霓を凌ぐの一偉人が、其書を透して活動するを見るに當り、思はず案を打て賛嘆すらく、之れなるかな此學の命よと。次で再び諸子百家の漢文字を見るに當り、躍如として文字生く、ウラル嶺低く楊子江淺しと嘲り、而して四百餘州外に氣焔を吐くの巨人、潑剌として高蹈するを見る。同時に詩經を讀んで風、雅、頌、賦、比、興を識讀するを得るに當り、詩經の文字亦尋常ならず、此時始めて漢文字が修辭學上大に發達せるものあるを味ひぬ。予此に至て喟然として思へらく、漢籍を讀む者多し而して味ふ者少なし、是れ漢學を冷視する者多き所以なりと。予や實に此時眞の微光を認めたるなり、而して以來歳なほ僅。鬱勃の念、辨ぜんとして縷々筆の長きを恐る、唯一斑を序す事粗なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

宮中女官論

中島俊子

女學雜誌は前々號に於て別乾坤を作の利何の點にあるかと題して、宮中女官の君が、獨身にて果て玉ふ事の、疑はしきをのべ、出て和樂の家を作り玉はん事を勸むるの、端緒を發せり。余も、曾て宮中に奉仕せし事ありたれど、日月甚だ永からざれば、言葉の遣ひ樣、髮の結ひ樣、袴の穿き樣等を、覺へんとして、猶覺へ盡くさざる位なれば、殆ど暗夜に道なき原野を歩するの思ひなし、鄙野俗に狎れざる爲、人前恥かしく感ぜし事屢々なりき、この鄙野なる余にも、先輩の君達が蹴がへし玉ふ蘭麝の衣影、迸り出る朱唇の鶯音、是ぞ世にいふ天人郷ならんかと、崇げにも見へ奥床かしくも感じつれ。いつまでも、この崇げなる樣、奥床かしき形、保存したき念なきにあらず、而してこれを保存せんが爲、雲塞り霧凝りたる空氣を留めん事は、痛く余が望まざる事にぞありける。

世界は既に雲開きたり、霧散じたり、往日西京人が、宮人の御通行を拜しても、眼やつぶれつらんとまで敬ひし雲卿月客も、今は町人百姓と政を一堂に議し、總理大臣も、是非これだけならではと、政敎の說明を、土臭き百姓に爲し玉ふの今日に當つて、獨り宮中の女官は、眼やつぶれんと信ぜし時代の腦髓を、其儘に保存し、何事も下々の汚らはしき事よと、玉壁瑤墻の外は都て糞土の如き思ひを爲し玉ふこそ、遺憾なれ。一度び身を宮窓にいれては、糞土と感ずる社會に、爭でか出るの心生ずべき。宮中の空氣に染むる數年の後、偶ま父母の家に歸り來る事あるも、家人の擧動何となく汚げに卑しげに感ずるなるべし、何となく貧乏げなるに、愛想つき果てるなるべし。是に於て、齡六十の隱居時代まで、奉仕せんとの念を、凝固ならしむるものと、斷定すべきの痕跡なきを得ざる乎。女官の君が、常に自から口にし玉ふ下々なるもの等と、相交りては、足袋に觸れし手を洗ひもせで、其儘に爲し置き、足のつきし風呂桶にて、手や顏を洗ふなど、金剛をこんごうといはで草履といふ如き、剥をまなといはでさかなといふ如きおむらをおむらといはていはしといふ如き、一事が萬事、とてもかやうなる汚らはしきものと、共に、世帶を持ち得べきかはといふ意味にて、終身奉仕するものとせば、是れを輕ろく評しなば、氣儘ものありとてもいひつべきか。されど、今日までは、別種の空氣わつく、かく然からし

めたるものなれば、毫も今日までの女官の君に對して、氣儘なりなど申すの心なきのみならず、今日までの女官の君には數十年一日の如く勤め玉ふの出精と忠實とは、深く推測するところなり。只余の望むところは、第二の女官と爲り玉ふの君は、今日の女官の君の妹に當り玉ふの故を以てとか、從妹に當り玉へばとかの緣因のみに依るに非らずして、其擇ぶところ貞淑賢才のものにあらんとなり、廣く淑德の乙女、聰明の夫人をして、奉仕の榮を得せしめんとなれば、今や草莽淑德の乙女聰明の夫人太だ少なきに非ざるべし、是等をして通勤するを得せしめば、紅霞紫雲四方に映じ、上下また壅塞するところなかるべし。若し下情は宮人のしらざるところ、とのしらざるところ最も奥床かしく崇きところありと云はゞ、却て其奥床かしからざる崇とからざる所を望むの外なからんか。

女官の通勤別に支障あるべきとも思はず、されど、已むを得ざるものありとせば、淑德の聞へある嫁期以前の乙女、愛人已亡の未亡人、世またすくなからざるべし。兎も角、今日以後の宮中は、人間的宮中にてあらん事を望む。この考たる、余が數年以前より抱くところあれど、思慮乏しきもゝの容易にいふべき事に非ずと、さしひかへたり。然かれども、到底如此事は望むべきものに非ずや如何ん、大方諸子の敎を乞はんとて謹みてかくは申なり。

緣の姿見

不忍池畔　鴻山生

長き春日の夕まぐれ、文讀み飽きて、そこはかとなく、歩み行くに、森の彼方に唱歌の聲、いとゆかしく聞へければ、誰ならんとあやしみつゝ、森下くゞりて、近づき見れば、何ぞ圖らん、これぞ、年月親しく交れるやんごとなき姫君が、二人の御妹を連れ、野邊の草花を摘み居給ふにぞありける。皆々御姿すぐれてたをやかなれど、取分け姉の文子姫、笑容の顔うるはしく、玉を欺く御風采なり。我れ姫君達の文學を好ませたまふを知るゆへ、からやまとの史話傳記を、いと面白く語りて、慰めまゐらする程に、姫君達は、皆さも嬉しげに打興じ、我の顔を見て、笑みつゝのたまふ樣

そなたのさが、いとさや〱しく、且つやまとは愚か、とつ國々の文事まで、能く心得居ることそ羨やましけれ、げに

そなたのやうなとのご持ち、花の晨や月の夕に、たつとき智識の流をば、汲て樂む女は、如何に幸多からむ。

姫君達は、猶も我に向ひ、某公の令嬢こそそなたの好逑ならめ、いや〳〵某侯の嬢君ならでは、そなたの氣に叶ふまじなど、色々と戯れ言云ひたまふを、笑もて打消し、稍まじめなる面持にて、その御すゝめは、さる事ながら、我には他に早くより思込たる人こそあれ、貴きあたりの方なれば、其名は容易く申し難けれど、まことに姿にはじぬ其心の美しさ、心のさまはうつらねど、うつりし姿の麗しさは、これ此の香袋の中に納めありて、肌身離さず持ちはべると、答ふれば、姫君互に顔見合せ、大に驚きたまひける。中にも、姉の文子姫は、我の才學をめでたまふのあまり、いつしか人知れず、小さき胸をいため居給ふ事、逢見るたびに惠まるゝ、深き意味ある秋波にあらはる程なれば、今我の一言を聞き、一方ならず、胸に漣打たせ給ひ、其女とは何處の誰あらん、如何なる風姿のものならんと、ひそかに我れのすきをねらひ、手早く香袋を奪取り、返したまふ氣色も、見えざりければ、我は姫に向ひ、香袋の中にありと云ふ、意中の人を見らるゝはづかしさ、のふ姫君、地位に上下の別あるも、人にはさる隔なし、智恵と徳との媒にて、縁を結ぶこそたつとけれ、さは云へ、風聞は千里を走るの駒なれば、若し其うつり姿を見知りたまふとも、しばしつゝみて人にな知らせたまひそ、

姫はうけがひつゝ、妹君より少し離れて、持てる香袋を見つめ、怨めしきかな、此中のすがたよと、かつらの眉も半さか立ち、心はさしも轟の橋を渡れる思にて、サット袋の中をうかゞひ給へば、思ひ掛なき一の粧鏡、一塵の曇りなきまでに、磨き立てたり。映らふ己が顔の氣高かさ、美しさ、涼しき目元、薔薇色の頬、得も言はれぬ趣には、姫も自づから見とるゝ許り、さてはと曉りて、今は喜び満面に溢れ、止め難くはあれど、妹姫にさとられまじと、いと、しとやかに、清き天女の聲音にて、そなたは能く撰びたり、さぞかし、彼女は嬉しかるらんと、のたまひし。げに、此時は、我も嬉しさ限りなくありたれど、はや、日も西に入相の、鐘の響きに心付き、またの逢日を約しつゝ、袂を分つ左り右、我書齋へぞ歸りける。

氷川伯を訪ふの記（上）

生野ふみ子

三月一日勝安房伯を訪ひぬ。伯の居は、赤坂氷川町四番地にあり、黒く塗りたる門扉、長屋のさまなどは、依然昔しのお邸宅風の儘なれども、玄關の邊りよりは、幾分か今樣に造り替へられたるものとおぼし。敷臺の前に立ちて音問ふと二三回、寂として物音なきは、坐ろに伯が閑居のさまを、想見せしものに似たり。少時して執次の女中出來りぬ。依て刺を出して、來意を告げ、伯より拜謁の許しを得たれば、彼の女中に導かれて、幾許の坐敷を右手に見、幾十間の廊下を經て、いと奥まりたる、伯の寢室に至りぬ。伯は褥の上に起直りて小やかなる机傍に引寄せつ、今しも何か認めものにても、なし居玉ひしかと覺しく、けい紙に文字書きたるなどが、堆く其上に重ねられたり。儂は先づ恭しく禮をなしたるに、伯はいと淡泊に「マアこちらへ來なさい」と其前面に坐を與へられ、今日は、大變忙しくつて居るが何か用事か。と横柄に問ひ玉へり。依て儂は、女學雜誌社に從事する者に侍るが、一二御高説を伺ひたきとありて、伺候しぬと申せしに、左らば御前も何か書くのか、夫じやア私を責め人の一人か、毎日々々新聞屋が幾人も遣つて來て困まる。ケチなことを聞くと、男ならば、辛き目にあはして追歸す處だが、女だからそんな事はしないが長くては困るヨ、エー何が聞たいんだ。エー。何かと非常に急き立玉へり。儂は兼てより、伯に伺はんと思ひ設けつる、天障院の御逸話、其他德川氏の、奥向の事など言語短かに伺ひつるに、さやうな事は、容易に話し難し、殊に頓の事にては、甚迷惑すれば、思ひ出して置て、閑な時に話そうとて、是等の話には、更に取合ひ玉ふ氣色も見へず、而して御前の方は女の事ばかりか、夫れやア猶困る」と、仰られたれば、此に話頭を轉じて、

國會に對する伯の感想如何

と問ひつるに、「ウン其事か、夫れやア今も議院の奴が二人も來て歸つた處だが、わしやア國會を譽めて遣るんだ。割合に能く出來たつて譽めて遣るんだ。わしやア議員の頭の一つや二つは、砕けて仕舞ふかと思てたんだ、割合に皆温和しいツア、政府の奴もそういつてるよ。國會でも何でも、稽古だから

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

子、マアあんなものだらふヨ。そうだらふ、どうだ、エーツ、夫れに全躰今の者のする事は、皆自分の頭から練り出したんじやないんだもの、甘く行かない筈だよ。

ビスマークがどうしたの、誰れがこういッたのッて、つまりは人の眞似ばかりしてるんだもの。アノ何かへ、國會だの、政黨だのッて、ありやア皆日本人が考へ出したのか……、そうじやァないだらふ、エ、ツ皆西洋の雛形だらふ。この勝安房は子、維新前の大事をしたのも、決して西洋の書物に據つたんじやないヨ、又ビスマークの眞似をしたんでもないネ、けれ共死に角遣つて來たんだもの、今の奴は議論は上手なり、學問は出來るが、口ばかりだから仕方がないよ。

皆が私の顔を眺て感心して居るよ御白粉が今朝チツト濃かつたけれどデモ容貌がイーから、人が私に見されるのも尤もださ……鐡道馬車の内で貴女が得意になつてすまして居るさ五歳計りの男の兒が、あの姉さんの顔は僕が持て居る福笑の御かめに似て居るよさ云へば、七つ計りの女の子がそうれー大方福笑の廣告かも知れナイヨ。

おゆり御前泣たつてこわれた人形がなほるものかれ。ゆり子は忿に泣顔を堤てニコ〳〵笑ひながら。ソーおつかさん……ホヽそんなら笑たら……ホヽ〳〵こんなに笑たらなほるのですか?。

小說

浮雲胸

雲峯子

第六回　空榮華（中）

人世眞の樂しみ、豈空榮、虚名にあらんや、風地の一角に起り、山野を席卷して、塵土を舞はし、砂礫を躍らす、其力甚だ大なるが如し、されど其勢ひ盡き、靜り來らば亦跡に何をか止む、人亦先きの勢力を忘れ、風とだも云ふ人なし、東風柔かに吹き、烟霞天地に棚引き來れば、春花梢に上つて、嬋妍の美を逞ふし、窈窕の姿を恣にす、誰か之を見て其爛熳たるを稱せざらん、然るに一夜風起り、雨打つ事烈し、朝に至つて千枝萬梢亦一片の花影を止るなし、何ぞ知らん、先きの美色麗姿は却つて是今日の悲愴を來さんとは、風聲花色の如きもの即ち空の空なりと云ふ可し。

夜深ふして月空に中し、心を高く天に澄し、眞如の光を地上に照らす、偶ま浮雲起り、彌漫して明光を遮ぎり、人目を暗からしむる事あり、されど風動き、雲散ずれば月は依然天にかゝり、光は再び明かなり、眞の榮華ならましかば何時も斯

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の如けん、世上に恐るべきものなし、されど土より出るものは土に歸し、世より得る所は世にありて散じ去らん、眞の樂しみは眞理より出で、誠の光榮は上帝に與へらる、此外に快樂なし、榮華あるなし、若ありとせば只それ風の如く、花の如く空しきものゝみ。

一度小說を世に公にし、好評を博し、名聲を轟しける春山女史、浮田なみ子は、いよ〳〵身を文事に委し、傍ら女權の爲めに盡す所あらんと決心せり。太平新聞の評最もよかりしを以てなみ子は或日車を驅つて、彼の新聞社を訪ひ、批評家なる人に面謁し、「過日は拙著に對して、好評を忝ふし、實に耻ち入りぬ」と、双頰少しく紅を潮して云ふ。批評家之に應じて「いと面白く拜讀せり、眞に御傑作の程敬服に堪へず、天晴れの御手際なるかな」と稱讃すれば、なみ子は打笑み、喜ぶことと限りなく、暫しは言葉も出でざりけり。

相話する事數十分、なみ子は攜へ來りし風呂敷包みを解き、内のものを取あげ、批評家の前にさし出し、「こは咄嗟の間に草せし短篇なり、もとより人に示すべき價値もあらねど、此儘篋底に埋め去らんは本意ならず、甚だ申兼ねし事にはあれど、貴社にて出版しくれずや」と云ふ。批評家其冊子を手に取り、暫し處々を開き見たるが容易くは答へもせず、双手を兩脇の手隱に入れ、首を垂れて考へ居たり。なみ子はそを見て如何なる答へをなすならんと思ひ、心配に堪へざりけん、顏の色、赤く亦靑く變はりしことも屢あり。最後の批評家の一言何を云ふかと聞けば「年末にて社事萬端取込み中故出版物は總べて謝絕し居る故、氣の毒の至りなれども今回は高望に應じがたし、遺憾ながら他に願はれたし、また明年ともならば御高作を乞ふて出版せん、云々と。なみ子は少しく失望の姿なりしが心を勵まし「さあらんと妾も思ひぬ」と一言もて應じて亦暫らくものをも云はざりけり。

批評家はなみ子の立去らんとするを見て「少しく待たれよ、我社にて親しく交はる所の一書店あり、其主に紹介すべければ行きて問ひ給へ、恐らくは出版せん」と云ふ「さらば紹介を乞ふ」と云ひてなみ子は亦坐に就きぬ。批評家は直ちに編輯局に立ち返り、一封の紹介狀を認め來り、之をなみ子に渡す。なみ子はやがて太平新聞社を立出で、山原書店に向ふて車を走らす。蓋し先きの批評家が紹介せし所あり。

書店に入りて亦例の冊子を取出し、併せて紹介狀を示す、店頭の小僧之をもて奥に入る、主人に見せんとてなり、亦小僧の立歸るまで「如何なる返事やあるならん」と、心配せしなるべし、身體までこゝろやすからぬ樣見えぬ。

主人はそを度々開き見て或は算盤を取あげてハヂキ、或は腕を組みて考ふ、終りに大決心を爲せし如く先づ膝を打ちて而して小僧に云ふ樣「今月ははや日もあらねば發兌する間もなし來る一月中旬までにて宜しくば出版せん。斯く云へど、小僧未だ坐を去らざるに主人は舌を鳴らし、今少しく面白からんには急に發兌するも可なれど、迚も多くは賣れじ」と獨語す。小僧店頭に歸り、なみ子に向つて主人の云る如く告げ、併せて主人の獨語せし所をも語る。なみ子は大ひに快からぬ顏色をあらはしぬ。多少怒りし心も起りしにや、急に冊子を取りて立去らんとせしが暫し考へ、「されば來月にて可なり、出版し呉れよ」と云ふ。小僧心得て主人の許に冊子を渡し來り、「承知せり」との、答へをなす、なみ子は此時書店を出づ。

書店は本町の通りなりければなみ子は夫れより道を轉じて神田本郷に在る友人を訪ふ、こは皆同じ學校にて學びける人々なれば、皆打解けて親しく語る。何處に至りても例の小說の事を云ひ出で、「天晴れの手柄なり」と稱讃すればなみ子は「否いと拙なき作なりど、謙遜して語れども、そは口のみ、心の内は如何にうれしからん、唯我獨尊の心も起りしならん、時々話しのうちに斯く思ひし事あらはれぬ。

なみ子は三人の友人を訪ひし後家路に向ふ。はや夕刻なりければ處々に燈光見え、市中自ら陰々たり、加ふるに黑雲天に滿ち、雪ふるかと思はれ、北風身を刺すが如し。九段の坂を上り盡す頃日は全く暮れ、招魂社前の電燈靑焰たるも物すごき心地せり。なみ子は車上にあつて頭をあぐれば四邊寂然たり、目を閉ちて瞑想すれば心中自から安からず、過る日金谷しづ子より云ひ來れる宗敎上の事抔思ひ出で、我知らず打沈むが如くなりぬ。

車ははや四谷門内に至りぬ、老松寒風に鳴り、行人稀れになりぬ、折からひゞく車聲に思はず頭をあげ、見る内に過ぐる一臺の箱馬車が遠ざかるまゝに轟聲亦消ゆ。なみ子は何時しか先きの事を思ひつゞけ、心自から苦痛に堪へず、されど何故に苦痛を覺ゆかを知らず、心底に靜ならぬ所あれど未だ頁

心の責むる所なりと思はず。苦しき故を知らば之を脱せんと欲し、我過ちを知らば即ち悔ゆるの時なり、憂苦罪過の理由を知らずは空しく苦痛を覺ゆるのみ。

「人世何事か成らざらん、名聲豈得るに難からんや、我是より大ひに爲す所あらん、女子にして芳聲を一時に轟かす、眞に我に於て一快事あらずや」と思ひかへせば、なみ子は亦樂しく感じ、先きの憂苦は大ひに慰められぬ。されば「彼の山原書店より發兌すべき小説の評は如何ならん亦一月ともならば新たに一篇を起草せん、過日認め始めて未だ終らざる論文、明日脱稿せば之を某新聞社に送らん、男子とて多くは淺學鈍筆の輩のみ、世に恐るべきものあらず、我是より女界改良の率先者とならん」など、將來に於ける妄想を腦中に畫き來れば、既に大名を博し、男子をも壓倒したるが如き心地して喜ばしき事限なく夢の如く覺えぬ。

されど空に架したる妄想は久しく止る可きにあらず、忽ち消散して雲烟眼を過ぎて亦跡なきに似たり、ともすれば忘想消え、之に依るの樂しみ去り、心底の不安心何時となく起り來るを覺ゆ、亦忘想は恰も細糸を以て繋ぎ止めたる風船の如し、糸若し絶ゆれば急に中空に飛び去らん、殘る所のものは何となく不滿足なる心なり、不滿足、不安心の起るは恰も妄想と反比例を爲す、されば妄想の止りがたきを知らば、不滿足不安心の禁じ難きを悟らん。

なみ子は心中の不滿足と不安心と起るあれば「是我進歩を妨ぐるものなり、かくては遂に何をか爲し得べけんや、名譽を一世に博するも快事あり、文人學者と伍するも面白し、貴女紳士と交はるも樂し、世にありて是なくば死するに如かず」と自ら其心を勵まして心を慰む、されど是豈眞の慰みならんや、憐れなるかな、心中の不快亦禁ずる能はざるを知らず。

車は家に着く、直ちに叔母の前に至り、歸りし事と、友人を訪ひし事とを語る。叔母はよき人なりければ直ちに打笑みてあいさつす。なみ子は己が室に歸りしに手紙一封ありき、見ればしづ子よりの手紙なり、過る日發兌せし小説は非常の好評なりとの事喜ばしと書きはじめありしが、終りに至りてなみ子は何となく快く見えざりき。

附録女學は次號の録附さなす。

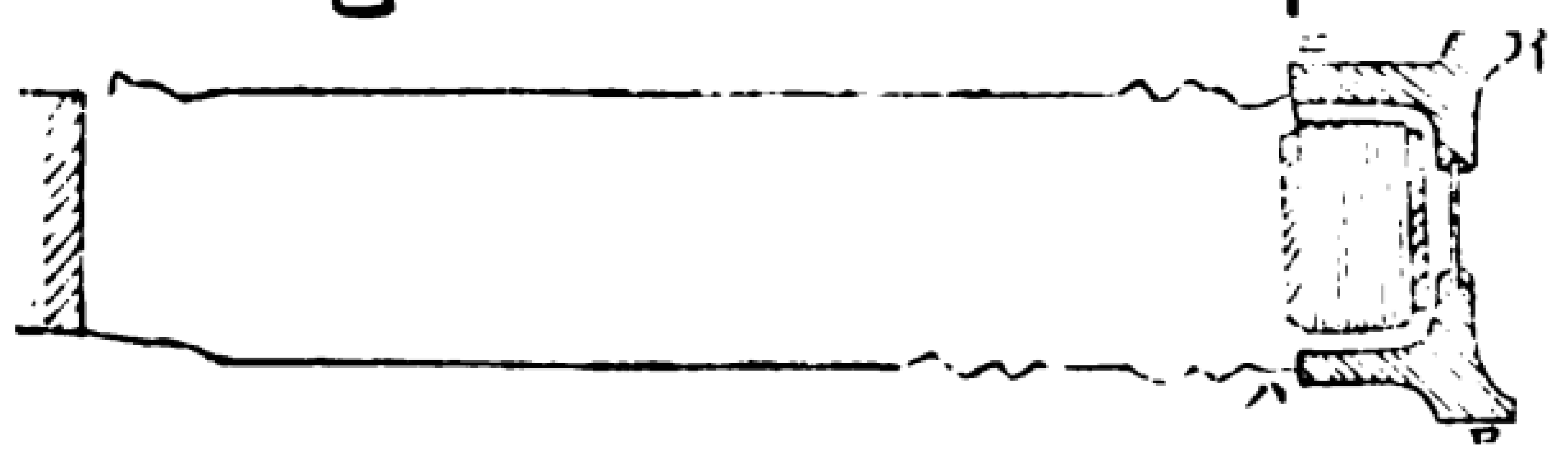
理學

電話交換所

吉田伸子

電話交換のはなしを致しますには先づ電話器の搆造と其作用とを説くが便利でござります。然るに此二事を理解するには音學、電氣學、磁氣學に就て多少の智識がなくては六ケしい事と存じます、併し今昔だの磁石だのゝ話から始めませば、大變長くなりますので、直に電話器の搆造に説き及ぼします。絹糸にて絶縁したる一條の銅線を以て、有力なる磁鐵杆を端から端まで螺繞し、杆の一端に軟鐵の板を甚だ近く接して、之を杆と離し、又接すると屢々なれば、其離接の度毎に磁鐵杆は磁氣の平等を失います、之が爲め電氣の流通は磁鐵杆を繞ふ所の銅線中に引起せられます。此鐵板が若し適度に薄ときは近傍の空氣の顫動によつて己も顫動を起し、磁鐵杆と相離接するでござりませう。又若し板の前で言語を發しましたならば、其調聲によつて離接の仕方が異るは明でござります。今此器を甲とし、別に之と寸分違ない乙器を造り、甲器の銅線を延して之を乙の磁鐵に巻付けそして一方の板を磁鐵と屢々離接せしめませば、其銅線中に引起されたる電氣は、流通して他の器に至り、更に其外部の銅線を流通しますゆへ、内部の磁鐵は感動を受て、磁氣の平等を失ひ、其鐵板と離接します、そして其離接の模樣は甲と少も違ひません、それゆへ甲の鐵板に向て音聲を發しませば、乙の鐵板も亦同時に同音を發します。

甲　乙



此鐵板は皆圓形の薄片なもので、其縁はイロハニなる木製の器内に保持せらるゝと圖に示す通です、今此器の一を上野に置き、他の一を淺草に据へ、其間は矢張り銅線にて繋て、上野にて此器の板に口を近て聲音を發しませば、鐵板は之が爲め顫動し、磁鐵は之に感じて磁氣の平均を失ひ、銅線中に電流を引起します、之が爲め淺草なる電話器の磁鐵も忽ち感じて其鐵板を顫動せしめ、之に依て再び空氣中に音波を生じます、故に耳を板に近けませば上野では何と云て居るか明かに聞取ます、同じ理により淺草より發言するとを上野に於て聞取り得は勿論なり(實際は送音器と聽音器を供ふるも理に於ては異る所なし)

右に述べました所で、上野で語るとがなぜ淺草まで聽えるかと云ふとは、畧々わかるかと思ひます。併し右の樣では但上野と淺草にある兩人のみがはなし得るだけで四谷、麹町、神田、芝、深川、本所等の人と自由に談話をしやうとすれば、相互の間に澤山な線を引かねばなりませぬ。それでは不便ですから、例へば日本橋に向け上野、赤坂、麻布、其他各所より線を引きまして談話せんとするときは先づ日本橋に賴み先方と自分との間に線を連絡して貰ふのです。此樣に致しませば、自分の家よりは只一本の線を日本橋に引たのみで、東京中は隨意に談話が出來ます、之れが乃ち電話の交換で、日本橋なる線の集つた所を電話中央局又は交換所と申します、中央局では只轉換器によりて兩談話者の間の線を接續するので此等の事は前號にふみ子女史の物せられたる所の如し。

敎育上勅文禮拜の事を痛論す
右女學雜誌第二百五十一號社説

敎育上の僞善及び瑣國論
右女學雜誌第二百五十四號社説

家政

「ホーム」議案

（二）ハートウエル、キヤザーウツド女史の答

我國（米國）に於ては家庭を整理するの制規なく從つて奴婢の務めとて定りたるものあらず、故に一家の主婦たるものは常に注意して奴婢を監督せざる可らず、奴婢亦主婦の監督なくんば家庭を亂り易し、されど斯く奴婢がよく其務を果す能はざらしむるは實に主婦の過ち少なきにあらず、故に家庭の改良を施さんとせば先づ主婦にして一層勉むる所なかる可からず、自ら怠つて人に勉めん事を望むは不可なり。

妾嘗て或家に招れて家族の者と共に食す、下婢止る時は談嘗て其事に及ばず、一度下婢食堂を去りしに一家口を揃へて其過失を云へり、妾之を聞くを快く思はざりき、蓋し人の過ちは公言すべきものに非ず、若これありとせば之を直接下婢に向つて告げ、却つて其功を稱するに於て揚言すべし、是下婢をして改めしむるの方法なり、過失を他人に告ぐる果して何の功かある、言ふ人自ら不快にして聞く人の樂しみ亦あるな

し、下婢をして其務めを果さゝらしむるは、多く家庭の整理せざるが爲めのみ。

人の最も過ち易きは婢僕をして其力に餘るの務めを爲さしめんとするにあり、是便利なるが如くにして最も不便なるものなり、最も便益のある方法は婢僕の務を成るべく輕くなし、其餘の事は主婦自ら爲すにあり、若順序なくして多くの務めを婢僕に爲さしむる時は一朝家に不時の事起り、死人若くは病人ある時は萬事停滯して不都合なる事限りなけん、之を避くる只順序を設け、便利よき方策を平常にめぐらすにあり、是即ち婢僕の仕事を輕からしむるにあり。

下婢を他人の如く見做すは甚だ不可なり、若下婢を見る事家族の一人の如くならば彼亦一家の益を計る事己の爲めを思ふが如けん、亦下婢を用ゆるに於て一の過ちあり、即ち其給料に差等を爲さゝる事あり、或は不馴の下婢、巧者と等しき給料を受け、或は一年務むるもの十年働くものと同等の賃金を取ると云ふが如し、妾嘗て一婢を雇へり、其始めて來りし時は多くの用事も辨ぜざりしが三年餘も經し頃は其智識に於ても有用の點に於ても始めと大ひに異れり、思ふに主婦が家庭の政務を賤しむるにより下婢亦之を輕んずるに至るべし、家事を輕んずるは恥づべきの至りなり、是家庭を腐敗せしむるものなり、心せざる可からず。

下婢を用ゆるに最良の方法は其家事に巧みなるの度に從ひ、次第に給料を増す事なり、而して每週月曜日の朝に於て之を渡す可し、度々給料を受くるが如く思ひ、常に勵みて働くものなり、而して其内幾分かを貯蓄せしむ可し、他日彼自ら家を持ち良人を助くるに當り、大いに益する所あらん、是よく家政を務めしむると共に其儉約の美風を養はしむる者なり。

保姆をして兒を愛せしむる方　　母

保姆は兎角雇はれ人の心地して、乳を飲ます兒を己がものゝ如く思はずとの非難あり。此は如何にしても免かれ得ぬ事の如く言ひなすは、大いなる誤まりなり。保姆をして全たく己が兒の如く思はしむる秘訣は唯一つなり、即ち主人夫婦成るべく兒供の事を構はず、たとへば泣くときも、わざと放りて保姆が之をアヤス迄は頓着せぬやうにするヿ肝腎なり。斯すれば、保姆は万事を一身に引うけ、宛がらわれ一人して育つるものゝ如く感じて、苟くも粗率にせざるやうになるものな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り。然るに、世の主人夫婦は此覺悟なく、兒が泣けば保姆が構はぬゆへと思ひて、直ちに走りゆき、引たくりてあやかすやうにするゆへ、たとひ平素淺からず思ふ所ろの保姆も、「旦那さまや、奥さまは、私しを赤さまをむごく取扱ふとでも思召すのか」、と心に疑念を生じ、其后は心中面白からず感じて、人のものを預かるやうな心地となり、奥底より深く愛するの念ひを生ずまじきなり。人は鬼に非ず、況んや保姆をするほどの婦人は即はち近ごろ子を産みたるの母なり、人情固より一と方ならず、子を思ふの愛に至つては、なみ〳〵の婦人に優るとも劣るとなし、之に赤子を一任すとも決して掛念なきなり。又た彼は、其生みの子を手離して他にウパ奉公をするは、實以て憫れむべきの情なり、主人たるもの其子を愛するにつれて、亦たウパが實子の事を思ひ出し、時々は之を慰さめ遣はすべし、斯すればウパは眞の母の情を日となく夜となく振り起し、其情を以て預かれる子に對し、暫らくして遂に眞の子に對するかの如く感ずるに至るべし。　以上二の秘訣も之を政略の如き思ひにて爲さば固より功なし、必らずや誠意誠心より發する、愛情の上の覺悟として行ふべし。

笑草

希有の術

ふみ子

昔し或る處に藥を鬻ぐものあり、大師の像を店頭に置きて曰く、我此藥は、大師の不思議なる告げに依りて調合したるものなり。左れば此藥を用ひて効驗あらん人は、此藥大師の手に附着すべしと。或る人試に一服を購ひて、其藥を大師の手の傍に持行きたるに、藥自ら大師の手に附着せり。是に於て人爭ふて其奇を語り、競ふて藥を求めけるほどに、俄にして彼藥賣巨万の富をなせり。人行きて其法を問ふに、容易に答へず、折から一人の少年あり、彼藥賣に告げていふやう、貴公の藥も奇妙なれど、我にも亦一の妙法あり、其は錢を拂はずして、物を喰ひ得るの法なり、試に我と共に來るべしと。彼藥賣を誘ひて、數回料理店に上る、一度も錢を拂ひたるとなし、左れど店主敢て咎めず。藥賣大に訝り、我彼藥の製法を敎うべければ、乞ふ汝の秘術を漏せよと。乃ち己れが秘法を說きて曰く、彼大師の手は磁石なり、我賣る藥は鐵片あれば、何人にても傍に持ち行けば、附着せざる事なし。扨 汝の方

はと問ひつるに、彼壯漢答へていふやう、我方も別に六か敷事あるに非ず、我はいつも料理店に至る前に、豫め錢を拂ひ置ありといひしとぞ。這は古きものゝ本に見へたる話しなるが、此間衆議院にての軟派の擧動、突然政府の復牒を得て毫も騷がす、恰も兼て特別豫算委員といへるものを豫選おし置たるものゝ如く、刷りものまでも準備しありたるやの噂を生ぜしは、いと訝しき樣なれど、軟派議員中亦、斯る秘術を心得居る者ありしにや、後學の爲め聞まほし。

能ある鷹

昔しの事は、假親しく知らねども、或人の話しに聞にき。二十年程以前には、淺草邊りに、人の望みに依りて、己が頭を打たす男あり。握り拳は何文、棍棒は何十文とて、頭を打たす事を營業にし、其を以て口を糊し居しと。打たるゝものゝ愚はいふ迄もなき事にて、只々喰へぬが悲しさ、かゝる事をもなしつるならむが、金錢出して左るものゝ頭を打ち、其を以て慰みとする人ありしかと思へば、昔の事ながらいと苦々しけれ。今はこれに似たるものありやおしや。事は變れど、種類全じきものあり。彼若き男子の內には、人に金錢貰ひて、仇も怨みもなき人の頭を打ちに行くものあり。是はおのが頭を打たすと、人の頭を打つとの差別はあれど、求むる所は何れも同一にて、金の爲に、己が身を、贄とおすものにてぞあるなれ。左れば心あらんものは、あたら今の若者をむざ〱二十年前の淺草の見せものと全じ價値のものとならしめざるやう、心して戴き度ものなり。是も左る類ひの一人にや、先つ頃或る名ある人がり至りて、金錢の借用を申込たる者あり、左れど素より一面の識もなく、又其若者に金惠まん理由もなければ、體能く斷りつるに、若者痛くうち腹立ち、さま〲にいひ罵りつゝ、なか〱に歸るべき氣色も見へざれば、主人もほと〱もて餘しつるに、此家の細君はいと心利きたる人にやありけむ、夫の迷惑左こそと察し、態と手づから茶菓子など持ち出で、丁寧に之を進め、夫の傍に坐を占めたりしに、元來此細君は、未だ二十歲を多くも超へず、其上いと容貌美しく、氣高き人なりければ、彼若者も何となく羞らいて、前刻よりの威勢にも似ず、少しく頭を垂たるに、不圖已が兩膝の上に八字形に突張たる手の、指先、爪いたく延て、垢黒々と其中に溜たるに心付き、我にもあらで指先を屈めぬ。夫より如何と

なく折けて、思ふと、いふと、我ながら、まどろしと思ふ程になりたれば、今日は迚もダメとや思ひけむ。そこ〳〵にして立去りにき、主人は見送りて舌打し、「チヨッ、ツマラヌ奴ダ」といひつるを、細君はきゝて「イヽエあなた、彼の男は、訖度何か出來る人でしやうヨ」といひければ、良人は「ナゼ」と問ひ返せしに、細君重ねて「デモあなた彼の人は、私が來ると、直に爪をかくしましたもの。ソラあなた、能ある鷹は、爪隠すと、申すじやアありませんか」。

批評

○幾多の韻文論（下）　雲峯子

俳諧の妙所は奇想若くは深意を短文字の間に偶するにあり、其格調の卑俗輕浮なるは一大欠點なる可し、歌は調ぶるものなりと昔の人も云ひしとぞ、徒らに奇を好みて其欠點を挽するは、日本文學の爲めに悲む可きの限ならずや。

新格調　古風なる長歌の格調は一定の法則ありて不便なり、如かず、此に一の新格調を創めんにはと、之を思ふもの、即ち七五の古躰を脱して韻文界に新天地を開かんとす、其内亦自ら二派あり、一は俳諧に則とり、他は定まれる格調を用ひず、余は之を名けて無法躰と云はんとす、俳諧句調の例は美妙氏近來の作中に見ゆ、余が之れに對するの意見は略上に云へるが如し、無法躰の例に至つては之を「九十九の嫗」に取らん、其七行以下「遊ばゝ子供のつねとして、棒ちぎり、履わらじ、取りちらしあるは必定」云々と、何處にか所謂格調なるものある、余はもとより詩想を重んぜざるにあらず、されど格調も韻文に欠く可からざるものなるを知る、「九十九の嫗」は無法躰のみにあらず、少しく格調のある所を見れば、即ち七五の外ならず、十三行以下「昔は杖と(七)云ふものを(五)、老たる人の(七)ひかるゝに(五)、今の我身が(七)是ほどに(五)と云ふが如き即ち是なり。

要するに七五は自然に我國語に適するものにて之を捨てゝ他に格調なるものあかる可し、自ら七五の法則を脱せりと思ふ新格調派の人士よ、靜かに顧みよ、未だ七五躰の外にあらざるを知らん、余は七五躰を固守せんと欲して之を云はず、七五の外今日用ゆる能はずと信ずるが故に斯く云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西洋のポエトリーの如く音聲を上下して讀むものならんには一行の長短は如何ともなし得べし、我國に於ては斯る詠方なきを如何せん、左れば大西祝氏が日本評論にて論ぜられしが如く若我國にアクセント(音調)なるものありて西詩の如く音聲の上下によつて讀み得るに至らば、一行の字數必らずしも七五に限らざる可し、之を讀むの音調新たに起らずんば我國の韻文は七五躰の外に出づる能はざる可し、改進に托し、新發明を口實として猥りに俗語を用ひ、漢語を用ひ、無法躰を用ゆるが如きは、韻文を進歩せしむるにあらずして、之を退歩せしむるのみ、日本文學を益せんよりは寧ろ害を流すもの多からん、謹まざる可けんや。

格調已に七五を脫せずとせば、卑俗輕浮、里謠の如く、地口の如く、誹諧の如きものを用ゆると、古來の和歌の長所を取り、改革を加へて進歩せしむると孰れぞ、尙文字の事につきて云はまく欲すれどこは他日に讓らん。

○新島襄先生傳　　警醒社發賣

新島先生の知己たるデビス敎師が原著を、村田松浦の兩氏が譯述せられたるものなり。先生の人品性格に付きては、評言未だ足らざる心地すれど、函館より脫走して米國に留學する迄の境界は、世人が汎ねく知らざりし事實を多少書現わしたり。著者が自序によれば、此書は后に編纂せんとする大傳記の緒言の如きものと云へり、果して然らば后日一層完全したるものゝ現はれんことを佇望す。但し、一斑は能く全豹を推すに足る。著者が、先生終身の事業の動機を、「信仰」の二字に歸せんとするは、頗ぶる智を盡せるの言と云つべし。其敎育上の覺悟を、先生自個が日記文中より拔摘して示すらく、

我校に關して常に心に忘れざる事三條あり、曰く(一)我等の礎石たる基督、(二)良敎師、(三)精良なる器械、此三のものは我校の光あり。

敎育の最良方法　余若し復た敎ゆるとあらんには、余は將に心を級中の最とも貧しきものに用ゐん、然らば其成功期して待つべきなり。

此他、感に堪へざるもの極めて多し、一々擧げ示さば、全卷を掲ぐるの外なし。譯述の文字、流麗あり、吾人はその寧ろ樸實にてあらんとを希へり。製本は至て粗なり。

兒籃

草と鹿の話し

ふみ子

鹿は、獸の中でも、何となく上品な、温和しい顔をして居る獸です。其角は細工物に遣ふに宜しく、皮は敷物となり、肉は甚味が美しう御坐り升。其鳴く聲は、左もあわれっぽくて、能く人の感情を動し升から、昔から能く歌になど詠まれ升た。都では、態々山奥へ、泊りがけで、鹿の聲をきゝに行く人もあり升が、奈良あたりに居り升と、毎晩々々鹿の聲を聞く事が出來升。之れは皆さん御存知の通り、奈良の鹿は、春日さんのお遣ひものだといふて、獵師にでも殺す事を許さなかつたので、自由に群れ歩るいて居るからです。

以上は只鹿の事をお話しするに就て、一寸申上た迄ですが、扨是から、其鹿が、失策つた事をお話し致し升う。或る處に一疋の鹿が居り升たが、獵人に追掛られて逃ぐる途があり升んでした。幸に傍に草の茂みがあつたので、やう〳〵其處へ隠れ込み升た。狩人は其邊迄追掛けて參り升たが、一向氣が注かず、まだむこうの方へ逃げて行つたものと思ふて、少しく此處を行過ぎ升た。スルト彼鹿は、まあ〳〵安心といふ顔付にて、そろ〳〵自分が隠れて居た邊りの、草の葉を喰ひかけ升た。食ふた草からスキが出來て向ふに見へるやうになり升た。狩人は不圖後の方で、パサ〳〵と音がするに心付き、急に振り返つて屹度ねらひをつけ、ツドンと一發、忽ちに鹿をうち殺しましたと。

なんと皆さん。此鹿は、最初草のお蔭で助かりながら、其恩ある草を食はふと、したのでとう〳〵自分の身を滅ぼしたのですから、自業自得ではあり升んか。恩を受けて恩に酬ひず、却て恩を仇で返すやうな事をすると、誰でもこんな目に逢ひ升よ。御覧なさい、主人の目を偸んで、居眠りをする小僧は、われとわがでに、頭を柱て打ち、奥様の惡口をいひ歩行く下女は、お暇が出ても、たれも他處へ世話をしませんでしやう。是は只手近ひたとへですが、一國の大臣様でも、國會議員の方々でも、みんなそうです。用ひられて、用ひられただけの事をせず、却て役目をかさに自分の勝手を計り、撰ばれて、撰ばれただけの事をせず、却て撰んだ人の仇になるやうな事をすると、皆此鹿のやうに、われと我身を損ふに至るのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

婚姻箴（愛山生に次す）

カす子

婚姻の使命　夫婦の相愛若し犠牲の信仰を害するとするか、其愛は肉の慾にて愛にはあらず。蓋し愛の目的は愛することが終局にあらず、愛することより由て天の靈性を開發し、以て善を作さんが爲なり。されば忠誠に「道」の爲めに生活せんと欲する者は最も斯相愛を必要するなり、相愛の必要これ婚姻の由て來る所なり。婚姻の使命茲に存す、小人俗輩婚するを須ひず、天は義人改革者に婚姻を使命す。

攝理の人　人間既に婚姻を使命せらる、さては爾が逹しの中に理想の人は存するなり、壓制の社會攝理を破ると案ずる勿れ、只一意道の爲めに奮勵すべし、さらば攝理の自然は爾に攝理の人を賦與すべし。爾幼少の時聘定せられたるを憂慮する勿れ、只一向道に向て信念すべし、誰か其子パンを求めんに石を予へんや、斯父母を創造れる「道」、實に攝理の自然は頑陋の父母をも和がしむべし。懼るゝなかれたゞ信ぜよ。

攝理の媒妁　理想の人既に存せり。決して比較的に選擇する勿れ、比較的の選擇は天縁の攝理を打破す、予へらるゝものは予へられざる如くにても予へらる、一時の慾情の爲めにアワツル勿れ。意志の定らざるうち、學窓に勉むるの間は、決して縁談に耳傾くる勿れ。自然の時期爾を呼ぶことを確信すべし。

蓋し婚姻は天縁にして人力の縁にあらず、されば縁談の諾否に關しては、友にも、爾自らにも、また父母にも委任し去る勿れ、只先づ道の攝理より任せよ、攝理は友と爾の父母をして天縁を結ばしめん。

愛の眞相　愛の眞相は附屬物なる門地、名譽、財寶、壯健、資性、才學、容色などを愛するに非らず、凡ての附屬を取り除ける「かれ自ら」を愛するに在り、即ち永遠なる「われ」先づ凡ての附屬を脱して―附屬なき―永遠の「かれ」を愛するに在り。鶴龜の千―万年若し永遠を意味するにあらずば、波越さぬ末の松山若し無限を意味するにあらずば、比翼連理は空の空なり、夢の夢なり。吾人は時として生理的作用に由りて愛○○○ラシャ情念を惹起すことあり、凡て斯かる時には靜思默考して熱愛の幻像より次第に附屬を取除き着るべし、取り除き得

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ずんば勿論、取り除きてかの幻像消ゆるあるか、これ愛には非ざるなり。而して同時に時日をして經過せしめよ。

靈界の握手　吾人生れながらに愛の原素を稟けたり、されど「道」を直感して初めて愛の天眞を煥發するなり。されば「道」を信じ「道」を愛せずして人を愛するといふは未だし、斯かる愛は愛にあらずして肉情と混ずると知るべし。只夫愛は「道」に由りて煥發せらるゝ故に相愛の握手は人界に望むべくもあらず、必らずや靈界なる「道」の前に於てせざるべからず。「われ」「道」に聯り「かれ」また「道」に聯りて初めて「われ」「かれ」に合す、玆よ合して握手する時、天眞爛熳たる「夫婦は一躰」の愛を成就す。噫、天緣既に結び得たり、時間これを消す能はず、空間これを隔つる能はず。

對等の愛　愛の眞相は生理的の作用にあらず、又憐憫の義俠心にあらず、實に心靈と心靈、パアソンとパアソンとの微笑の握手なり、何ぞ他に要むるを俟たん、されど人間もとこれ社會的の動物なり、さては學識、趣味、理想等の一致を要するなり、一致とは對等の意にあらず、只感知し通達し得るの謂なり、換言すれば理想にも學識よも趣味にも双方の間に相知らんとなり、相通ぜんとなり、ア、靈肉兩界の知己、これ圓滿なる對等の愛の謂なり。

默念の餘裕　情念ムラ〳〵と迸しりて天地を忘れ、心緒解亂れてウットリとする時、爾靜かに省るべし、時を葬るの愛は亦時に葬らるれば也。恍惚焉として天の使の如く菩薩の如く視ゆる時、爾嚴かに默すべし、愛は善惡美醜長短に對して盲目ならねば也。これ若し天緣にあらずんば余れは失望の犧牲たらんなど、誠實に思はゞ、爾心を轉じて祈禱せよ、失望の犧牲心は高潔の愛にあらねば也。

寄書

○女學雜誌は鮑叔の如し

A・B・C・

愛山生が評に更に一語を加ふれば、女學雜誌は殆んど偏僻に似たるほど、未だ名あらざる一書生、一平民の事のみを大業に言ふのみならず、其大業に紹介する所ろの人には尤とも注意すべき價値あるものなれと言はん。何んとなれば、國民之友が既に名高くなれる知名の人のみを網羅する如く、女學雜誌は未だ現はれざる人を留を引くほどの信切を以て之を世に推崇せんとするを以ての故也。余は、女學雜誌によりて初めて石橋忍月、内田不知庵、磯貝雲峯の三氏を知れり、二氏は女學雜誌を以て門出と爲しぬ。又山田美妙齋氏も、いらつめに於けるより女學雜誌に於て先づ知り初めたり、二葉亭氏の名は女學雜誌が激賞したるによりて初めて心付ぬ。若松しづ子、つゆ子、吉田伸子等の女性は言ふに及ばず。日本評論も、植村正久氏の文も、松村介石氏の精神も、傑士押川方義氏と云ふ人の事も、愛山生と云へる批評家の事も、皆女學雜誌に於て知りぬ。女學雜誌は好んで未だ現はれざる人を紹介するものと云つべし。

○一片の檄文何の効かある

川合信水

田舍の或る靑年政治家、一片の檄文を飛ばして、天下の人士に訴へたり、其擧や誠に殊勝なり、然れども彼の檄文、果して能く人を動かすに足る乎、余輩は堅く之を信ず、人を動かすは決して口頭の言語にあらず、筆端の文章にあらず、天上より下るの靈なり、火なり、誠心より出ろの涙なり、血なりと、故に余輩は警告す、社會の改良を以て任ずる者は、宜しく先づ自ら省みて、靈に感ずるや否や、火に燃さるゝや否や、誠の血と涙あるや否やを思はざるべからず。

時事

○二月二日の衆議院

豫算案特別委員の報告を可否する、三月二日(最后の)大討議は、悲しき哉三十二の多數を以て、六百五十一万千圓の減額說に可決したり。此日、島田三郎君、並びに尾崎行雄君の論辨中、深く記臆し置べき辭何多かりき、左に抄錄す、

(島田三郎君)元來豫算を重ずべきは重んず可きで御座りますが、豫算の結果は其影響一年に止るもので御座りまする、議權に關係する事は后來の例を開き議權の伸縮にも關係することで御座ります、然るに金額の上に就ては大要折合て、前の二箇條を棄去る時は實に惜む可きことで御座りませぬか。

(尾崎行雄君)……殊に彼等の爲したる所の結果を見れば、恰も緣日で花を買ふやうなことである、イヤ二百萬圓はマケて下さらぬか、さか三百萬圓は如何であるかと云ふやうに、殆ど緣日で買物をするやうな手續を以て、談判を開いた、左樣なことで帝國議會の神聖を保つことが出來るか、體面を維持することが出來ると思ふか、初めには七百五十万圓要求したと彼等自ら申した、何故に七百五十万圓の要求が、何人が宜しいと云ふことを彼等に敎へたか、…………同意を得ざる以上は說明をせぬと二次會に早まつて述べて置きながら、二次會を經て同意を求むれば、同意とか不同意とか云ふは、意志の定まらぬグラ／＼した内閣の方々であると思ふ、之を要するに委員の爲し方も甚だ不都合と思ふ、政府の爲し方も亦甚だ不都合である、此不都合同志が符合て、何故に箇樣な報告書を此處に提出したかと思ふと、是には抑も彼等の考があるであらうと思ふ、若し間がよくばゴマカして頭數の多きを賴んで、譯もなく此案を通過させるが彼等が第一の希望である、若し通過することが出來なかつたならば、道理ある攻擊を爲す者に不成立の罪を歸さうと云ふのである、……然るに明日の命も分らぬ内閣の約束を賴み、何百万と云ふ金が出來樣と信じて居るは、如何にも迂濶千万なる考へである、抑ゝ内閣の壽命と云ふものは何れの國でも極つて居る、况んや明日をも計られざる我が内閣の如きは、殆ど風前の燈と言つて差支へない、彼等自ら何百回官制を改革すると此處に出て言へばとて、其約束が何んになる。

○算盤上の誠意

多く減ぜんと云ふものも、若し只だ事あれかしと望めるの形跡を示さば、人信ずること能はず。少しく減じて平和を維持せんと云ふものも、若し彼に通ずるの疑點を存すれば、人同情を表すること能はず。高く怒るも、温和に和むるも、共に誠意誠心より發せざれば、人を動かすに足らず。

○辭職議員

人は言ふ議會腐敗せりと。之を去るを以て潔士の如く思ふは大ひなる不信切と云ふべし。初より入らざれば止む、既に撰擧者の望を負ふて、天下の公議所に登る、もし之を淸むること能はずんば、何の面目ありて、郷關の知己に見えんとする。

彼の「ホルナー」を見よ、彼は、何如に腐敗したる議院の間にも、尙ほ德義の感化力の洪大なることを示さんとて生れしにあらずや。足を洗ふを以て、心を淸くする者と誤認すること勿れ、吾輩は、正しき人の議會を去らんとするを痛むもの也。

○外國に於ける日本婦人保護法案

民間提出の廢娼論あり、政府亦た題名の案を提出す、本年の帝國議會は、婦人問題に對し隨分信切なりと云ふべし。廢娼

論案に關わりては、吾人すでに年來の說あり。他の、外國に於る日本婦人保護法案は、大抵の事にては無効なり、之を有効ならしむるは、內國の公娼を全廢すると其一也。外國在留の領事公使をして一層信切ならしむると、一層權力あらしむると其二也。思ふに他に良策なけん。

○議員諸君を送る

議員諸君の勞をねぎろふ。諸君が骨折一と方ならず、苦心何ものにか比へん。每度失敬の事を申したるは、激したれば也。情に於て諸君に謝するや久し。諸君希はくは、躰を安んじ、本年末再たび、會合して國事に盡力せよ。

○內閣諸公を祝す

諸公ホット息し玉へるなるべし、近頃の御辛苦、維新の戰爭にも優りつらん、左れど目出度最后にて珍重に存じ奉つる、願くは、后八ケ月間に、よく〳〵改革を施こし、鬼再來の日迄に、十分準備あれ。

○撰擧者諸君!

辭する人は清き人也、決して任を解くと勿れ。其他の人は、言質速記錄にあり、諸君、請ふ面あたり談ぜよ。

問答

可愛子

問。教育家になりたいさするものがあります、之を養成する基督教主義の女學校がありますか。(神戸山々生)

答。明治女學校に師範科があります、其他英語を學びたいさ思し召すならば宣教師の立てた學校が、澤山にあります。

問。文章を丁寧に批評添删し、また文學上の質問にお答へ下さる方はありませぬか、尤も其先生は和漢、何れかに偏した人でなく、未來の文學界に適應するやうな人です、貴社の撫象子、雲峰子、或は其他の先生方にて、右の願を聞届け下さる方はありませぬか。(靜岡にて雛島子)

答。撫象子も、雲峰子も、其他の社員も、目下非常に多忙で、お氣の毒ですが、お賴みに應ずるとが出來ませぬ、外にどうかさ思ひましたが、別に心當りの人もありませぬ。

問。假名を習ふによい手本はありますまいか(下野小俣のぶ子)

答。小野鵞堂の書いた「かな習字帖」などが宜しいでせう。

問。私は一昨年から救の道を聞き始めましたが、先頃からどういふものか、心が落着かず、何やら理窟ばる樣な心持で、反つて人を愛するとが出來ませぬ、誠に困りますが、ドウしたら此癖が直つて、眞實に人を愛するとが出來ませうか、何卒御教示を願ひます。(京都愛讀生)

答。聖書に「信仰さ望さ愛さ此三の者は常にあるなり、此中最も大なるものは愛なり」さあります、此大なる愛は小さき議論の中に遣入り込むものではありませぬ、愛は議論よりも高く、廣く、大きいものです、されば之を口や、筆で申し上ろのは、中々の困難です、故に短くつまんで申し上げませう、如何にせば人を愛するとが出來ますか、曰くたゞ己れを棄てゝ基督に從ふのです、畢竟自分の思さ、自分の考を以てばこそ、人を愛するとも出來ないのです、故に自分を殺して、基督を我が中に入れるのです、聖書に「爾曹基督の心を以て心さすべし」さあるではありませぬか、自分を殺し、自分を棄て、基督の心を以て心さしたならば、ドウして、人を愛せないことが出來ませう。

●前號の問答欄に婦人矯風雜誌を非賣品さ書きましたのは誤りでした、該雜誌も十八錢賣品であります。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通信

可愛子編

●三重縣通信　○學窓會雜誌を發刊す　教育的の新團躰なる學窓會よりは、此度「學窓會通信」てふ雜誌を發刊せり、論說、記事、雜報、通信、漫錄、學藝、寄書の七項に別ち、每月一回發行(但非賣品)。

●大阪通信　○大阪婦人教育會の發會式　は二月廿一日午後大阪青年會舘に於て開きたり、本間はる姉の司會、奏樂、ダヤローグ、次に本間牧師、ケレー夫人の演說あり、終て梅花女學校生徒の物理試驗抔あり、會する者二百七八十名。

○大阪川口照暗女學校　にては、我國の婦人にして、我國從來の音樂を知らざるは不都合なりとて、去る二月より一人の法師を雇ひ入れ、是迄の「オルガン」「ピヤノ」等に加へて、琴などをも、淸潔なる歌を撰んで教授せらるゝ由。

女報

可愛子編

●御歌會初　二月二十八日、御歌會初。

●英國の女皇寄贈の駿馬二頭　は同國公使ヒューフレザー氏、參内の節、我天皇陛下に奉呈せり、

●故三條公爵夫人の病　同夫人は、公の薨去前より病氣にて治療中なりしが、ゆくりなくも、公と永別せしより、悲嘆の餘り一層力を落されしものと見え、昨今は病大に重り、最と氣遣はしき容躰なれば、醫師は晝夜詰切りにて、治療に手を盡し居れりと聞きぬ。

●德川義禮公の夫人　よし子の方は、二月廿八日名古屋に赴かれたりとぞ。

●歐洲風の慈善演劇會　歐米紳士淑女の多藝にして、往々是を善事に活用するは、世人の知る所なるが、此程某國公使夫人の發起にて、内外貴顯の賛成を得、本月二十一日を卜して、鹿鳴舘に盛大なる歐洲風の演劇會を催ほし、其收入を以て慈善の事業に供せんと、目下專ら準備中なりと、當日は何人にても券を購ひ參觀するを得るとのとなり。

●慈惠醫院　東京芝の同院は益々整頓に赴きたり、同院は貴婦人の寄附を以て設立し、專ら貧困にして、自ら治療し能はざる病人を施療する所なり、看護婦は試驗の上採用す、初は見習生として、數ヶ月試業し、後生徒に進む、卒業期は三年にして、每日學理的より看護法を研究し、又直接病人に接して實地修業す、其業務の繁忙なる、每日午前四時に湯を沸し、小桶に入れて、病人の顏手を、一人每に丁寧親切に洗ふ故、今日か、明日かの危篤なる病人も、其苦痛を忘れて喜び合へり、看護婦長は男女兩室に各一名ありて、三四年間海外にありて看護法を修め、熱心なる献身的の慈善家なり、身には質朴にして粗末なる黒服を着し、常に病室を離れず、看護婦を指揮するとぞ。

●女子教育方法改正に就て　石川よれ子は、今度貴族院に請願書を差出したり、紹介の議員は三浦安子なり。

●外國に於ける日本婦人保護法案　政府提出の同案は、二月二十八日貴族院に提出せられたり。

●支那の婦女に淫賣の出稼なきは何ぞ　日本婦女の淫賣を目的として、海外に出稼する者あるは、吾人の常に慨歎する所なり、而して彼の隣國なる支那の婦女は、其海外に出るものとては、夫に隨ふ妻、貴官に伴ふ妾、並に洋人の子守婆等にして、未だ海外に淫行を流出せしめざる所以は、蓋し外人を夷として嫌ふが故なりと、是れ豈支那の僥倖にあらずや、目を轉じて、支那の内地を見れば、世人の知る如く、淫風盛に、公に、密に、賣淫盛にして、甚しきは聾驚の出るを見る、斯る景況なるにも拘はらず、上等の娼客は、外人を謝絶する由、日本新聞に記載しあり。

●女生徒の減少　先年來、一時女學生增加し、爲に神田小川町邊の下宿屋、及び學校の寄宿舍には女學生中々に多かりしが、國粹熱の高まると共に、次第に減少し、昨今の數は、先年に比すれば三分の一なりといへり。

●櫻花若し靈あらば　定めて之を喜ぶべし、昔より「花は櫻に人は武士」とまで稱へられたる櫻花も、これまで、不潔なる遊里に植へ付けられ、心なき醜男醜女に眺められしが、今年よりは、政府よりして之を遊里に植ることを禁ぜられたり、花よ、花よ、日本の花よ、吾人は深く爾の爲めに賀す。

●橫濱婦人慈善會　の人々は、本月中旬を期し、慈善會を催ほすよし、會場は貿易商組合會舘の筈にて、目下計畫中なりと。

●マダムペチー女史日本に來る　前號に載せし、世界有名の唱歌女マダムペチー女史は遂に上海を出立し、先頃神戶に着し、彼處にて一興行なしたる後、此程橫濱に來り、同港に於て合奏會を開きたり、或人其夜聞きたる客の一人に向て女史の技能如何を問ひしに、答へて、一度聞く者は終生之を忘れ難からん、之を聽かざる者には、其妙味如何を語ると能はずと云へりとぞ。

●西京盲啞院　は日本最初のものにて、其名は遠く英米にも響けりとぞ。

●上毛岩鼻婦人積德會　は婦人の淑德を高めんとの目的にて、去る二十年二月開設せり、目下會員凡そ百名内外にて、頗る盛なり、會頭は吉村照子、副會頭は並木清子、幹事は林常子、近藤雛子、中島艷子三氏なりと。

●珍らしき婦人　三重縣志摩國島羽町なる、前田お蝶となんいへる婦人(四十二)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、嫁して僅かに二十才に足らぬ頃、不幸にも夫に死別れ、其後は斷じて再縁の勸めをきかず、健氣にも、かよわき女の手一つにて活計を立て、老ひたる母に孝を盡し、忘れがたみの幼兒を育て、絕て怠りなかりしが、ひま行く駒の足はやく、幼兒は生長して十七才の春を迎へぬ、稍々喜びの眉を開かんとする間もなく、死の手は早くも其愛子をば、地下に誘ひ去りたれば、今は賴みの綱の切れたる心地し、落胆一方ならざりしが、これも天命と諦め、それよりは、專ら老母に孝養を盡し、晝夜賃仕事をなして、倦むこともなく、撓むこともなく、租稅の如きも、納期を一日も誤りたることなく、世間の義理も欠きしことなければ、近邊の者皆其行爲を褒めぬものはなしと、今の世には珍らしき婦人といふべし。

●師範學校女子部一覽　現今全國師範學校中女子部を置ける者は二十五縣、即ち新潟、千葉、栃木、靜岡、山梨、長野、宮城、福島、山形、秋田、京都、福井、石川、富山、島根、岡山、廣島、山口、香川、愛媛、高知、長崎、福岡、佐賀、鹿兒島にして未だ其設置なき者は、次の廿二縣、即はち東京、神奈川、埼玉、茨城、群馬、北海道、岩手、青森、大阪、兵庫、奈良、三重、愛知、滋賀、岐阜、和歌山、鳥取、德島、大分、熊本、宮崎、沖繩なりといふ。

●福井縣下の女子職業　は彼の有名なる絹織物、及び蚊帳織物にして、夏時は製絲の業をもなすなり、絹と蚊帳の織物は、年中絕間なければ、貧家の女子には適當の職業なりといへり、尤も其賃錢は、一日に付き、上等十三錢より、中等七八錢、下等五六錢位なりとぞ。

●福井縣下の娼妓貸座敷地　は福井、三國、武生、敦賀、小濱、葦原、鯖江、金津、大野、勝山等なりと、吾人は早く此醜窟の廢滅を望む。

●横濱の密賣淫狩　横濱に於ては、頃ろ密賣淫を狩り、毎夜四五人を捕縛せしかば、目下其數大に減少せりとぞ。

●山梨廢娼義會の廢娼建議

二月二十七日、弊社々員川合信水は、山梨廢娼義會の委員として、同縣男女有志者連名の公娼全廢請願書を、衆議院に差出したり、紹介の代議士は、同縣撰出の古屋專藏氏なり。

●朝鮮國王皇后兩陛下并皇太子殿下の御璽　曩日、朝鮮政府御雇日本任事小川實、及典園局奉辦安智壽の兩氏は、陛下の命を奉じ、國王皇后兩陛下、并皇太子殿下の御璽彫刻を、日本橋區大傳馬町楠山に注文したりしが、本月一日出來上りたるを以て全國公使舘に納めたる由、右御璽の摸樣に、國王陛下は李氏なる因に依り李の枝花、皇后陛下は鳳凰、皇太子は龍を彫刻し、餘程美事なる趣。

●ナポレチンボナパーテ家の一夫人　マリアンはコルシカに住めり、同家の人にしてコルシカにある者は夫人一人のみ、夫人はルシン、ボナパーテの妻なりしが、不幸にして、今は覆水破鏡の身となり、アジヤシオ村に於て、閑靜なる生活をなせり。

●英國女皇手づから絲を紡ぐ　の寫眞圖は、ボルモルパシエットより轉載して本月二日の國民新聞に見へたり、勸勉の國民は能く勸勉の女皇を戴き、儉節の女皇は能く儉節の國民を治む、ウヰルソル宮中絲車の響きは小なりと雖も、ランキアシヤ郡中幾千百の紡績所は大なる響を以て之に應ぜり云々と、同新聞記者は誌しぬ。

●獨逸皇后自ら聯隊を率て運動す　獨逸皇后陛下は、去る頃同國テンプルホーヒルドの觀兵式に、自ら御馬上に聯隊を卒いて運動を試みられしかば、獨逸皇帝は、之を御覽じて龍顏殊に麗はしかりしと申す、此日皇后陛下は、頭に駝鳥の鮮毛を蒙りし三角形の白帽を戴き、身には近衞武官の正服にて、雪をも欺く白衣を召され、其白衣兩肩及び襟飾は、金絲まばゆく緣を取りて、聯隊標號赤白色を貼けたるなど、一と際目立ちて、恰も天神の下降せるが如くなりしと、獨逸が凜々たる尙武の氣風推して知るべし。

●賤業婦女救護會を起すの必要　と題して、二月二十六日の朝野新聞は論じたり、其論の要點は、下等婦人の惡弊を矯めんとせば、則ち上流婦人の慈善なる、溫篤なる愛情を以て、彼等腐敗の心根に吹き掛け、注ぎかけて其病を救治するの外あらざるなり、其法素より一にして足らずと雖も、茲に上流婦人が一大團結を計り、賤業婦女を救護するの目的を以て、廣く義捐金を募り、以て賤業婦女の爲め、各々相應の正業に就かしむるの方策を立つるが如きは、實に急務中の最急務なりと云ふにあり。

●通回馬喰町一丁目の洋物店、長瀨富郎氏方より賣出せし、花王シヤボンは、衞生化粧の兩用に適するよしにて、其品善良、殊に芳しき薰りを籠めたり。

週報

●官令　二月二十三日勅令を以て帝國議會の用に供する官有財產に關する件を裁可公布せらる。●二十八日勅令を以て高等水兵錬習艦條例廢止の件を裁可公布せらる●同日勅令を以て砲術錬習艦條例中改正の件を裁可公布せらる。

●政治　二月二十一日代議士中江篤介氏辭表を呈出す●二十四日片岡健吉植木枝盛小林樟雄小西甚之助氏等二十九名立憲自由黨に脫黨を屆け出づ●同日內閣會議●同日政府の覆牒案出づ●二十七日板垣伯自由黨を脫す●同日代議士杉浦重剛氏辭表を呈す●同日內閣會議●二十八日保安條例を施行し居殘りの壯士五名を退去す●三月一日自由平等經綸雜誌出づ●二日衆議院最後の論戰硬派全く敗る。

●社會　福音週報發行禁止せらる。

●敎育　二月二十三日第一高等中學校敎諭木村駿吉氏非職を命ぜらる●本月一日神田中猿樂町二番地竄習學舘開舘式あり。

品名	三月四日
白米(一石に付)	
一等米	十升九升七合
二等米	一〇一
三等米	一〇六
四等米	一〇八
五等米	一一一
正米(一石に付)	
越中米	一斗一升五合
美濃米	一四二
尾張米	一四一
肥後米	一三八
一志米	一四〇
雜穀(一石に付)	
本貫大麥	二斗二升五合
上州小麥	一四八
竹林麥	一三〇
梅澤大豆	二〇〇
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一四〇
白胡麻	一三三
黒胡麻	一四五
鹽(一石に付)	
赤穗	二斗五〇
大鹽	二六〇
本齋	四一〇
新齋	四四二
醬油(一石に付)	
最上	樽八分一厘
極上	九五
上物	一四〇
中物	一九〇
並物	二四〇
味噌(一石に付)	
地製上白	貫六、五〇〇
同上赤	六、五〇〇
同紅赤	五、〇〇〇

品名	三月四日
製茶(一貫目に付)	
山城江州稲頭	円二、四五
同大頭	一九五
同小頭	一六五
同中茶	一二〇
狹山稲頭	一八〇
同大頭	一四二
同中頭	一二七
同中茶	一〇〇
乾海苔(百枚に付)	
洲崎上々	円一、〇〇
大森上々	一、〇〇
深川極上	一、〇〇
大師湖田極上	七〇
上總極上	六五
鰹節(十貫目に付)	
薩摩大	円一五、五〇
伊豆上	一七、五〇
城ノ腰	一七、〇〇
遠州上	一六、五〇
房總上	一四、〇〇
銚子上	一三、五〇
水戸磐城上	一三、〇〇
土佐大	一〇、〇〇
白木綿(一反に付)	
玉鳩	反二、六五
綾鶴	三、九五
日ノ出鶴	四、二五
若源	三、三〇
白梅	三、九〇
伊勢晒(一反に付)	
綾川	一九〇
奈良和	一九〇
三閣	一七〇
宮川	一七二
雲井	一七五

品名	三月四日
眞綿(一貫目に付)	
上金	円一三〇、〇〇
並金	一二五、〇〇
無銘	一二〇、〇〇
綠綿(一円に付)	
新坂上銘	七八五目
同京丹大入	八〇五
同三州上銘	八二〇
同二州文庫入	八五〇
同地綿文庫入	八九〇
炭(一俵に付)	
伊豆上	俵円四、五〇
同中	四、八〇
同下	五、五〇
丸備上	二、一〇
角備上	二、八〇
土釜	七、五〇
切炭	七、〇〇
薪(一円に付)	
鹿島堅木	五束
野州同大束	二五
同並	六五
曾根大束	三三
雑木大束	二五
水油(一樽に付)	
地水	円八、四〇
胡麻水	一〇、三〇
荏油	一一、〇〇
桐油	六、七〇
綿油	七、五〇
坂水	九、一九
石油(一箱に付)	
チヤスター	円一、八五
デボース	一、六五
ホーキ	一、六八
ロシヤ	一、六〇

家庭廉價 **女學書類發行** 女學雜誌社編輯

子供の談
紙數八十葉 郵稅なし 定價十二錢

右は子供の為にある好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、螢の君。第三、熊と旅人。第四、瓜と日の喧嘩。第五、ハイ〱とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔馴なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮
紙數六十七葉 郵稅なし 定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案內の事。散步、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち。西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理
紙數百九十葉 郵稅なし 定價廿五錢

右は、月經の事。懷妊の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案內
紙數百廿葉 郵稅なし 定價五錢

右は八木類辰氏の講述にかゝるものなり

見育て草
紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學
紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

高木商店樂器着荷廣告

○弊店義兼テ歐米ヘ注文致置キ候ピヤノ。ヲルガン。ヴッイヲリン。並ニ歐米諸大家ノ音樂書籍數百種今回着荷致候ニ付非常廉價ニテ販賣可致候間御一覽ノ上御講求被下度伏テ是祈ル。

○和製ヲルガン儀モ近頃諸機械ヲ設置キ凡テ歐米製ト異ナル無キ品ヲ製スルニ至レリ貳拾圓以上百貳拾圓迄數種

○ピヤノ。ヲルガン等深切ニ調律修可致候

東京市神田區通鍋町拾番地

高木商店

但雛形代價附御入用ノ節ハ御申越次第直ニ郵送ス

東京經濟雜誌

第五百六十一號目錄

社説

◎某伯ニ答フ……

◎小作料借地料地代ノ解釋……

◎衆議院議決ノ反覆……

◎大島貞益君ニ答フ……

◎輸出稅全廢同盟……

◎佐藤晋祿君ニ一言ヲ寄ス……

◎遠ク下野新聞ニ答フ……

◎植木枝盛君地主ヲシテ小作人ニ諂ハシメントス……

論説

○日本人民ハ果シテ海關稅ヲ納ムルノ義務ナキヤ……

寄書

○大島坪谷二君ノ説ヲ讀ム……

○民力休養策實行ノ先鞭ニハ車稅全廢ヲ斷行セザル可ラズ……

田制一斑

○古今田制一斑……

銀行及商業之景況

兌換銀行劵發行高……

同流通高及正貨準備ノ景況……

外國諸銀行ノ景況……

橫濱ノ商況……

東京金融ノ景況……

東京公債及株劵ノ商況……

東京限月米及正米ノ商況……

東京諸商品ノ商況……

官令（數件）

海事小説

○商船「ロケット」號航海紀行（續）……

帝國議會

○貴族院二月廿日、廿一日、廿三日、廿四日ノ議事○衆議院二月十八日、十九日、廿日、廿一日、廿三日、廿四日、廿六日ノ議事○井上角五郎君ノ批評

雜錄

○廿四年一月中外國貿易ノ景況○東京新報ノ非地租輕減論○非地租輕減論ノ勢力○山梨郡內ハンカチーフ不景氣ノ景況○故內大臣三條實美公ノ葬儀○三條公爵ノ履歷○立憲自由黨ノ分裂○惡ンデ其美ヲ知ルモノ少シ○大成會ノ波瀾納マル○經濟學協會二月例會○米國元老院金銀貨無制限鑄造案ヲ可決ス○全國金利の景況○廿四年一月中足利物產市場取引統計表

定價一册金七錢（市外郵稅五厘增）

東京市京橋區彌左衛門町

經濟雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●奏効確實の證明

拜啓余は昨廿三年四月十九日附を以て**身躰白色法**の秘傳を受け其奏効著しく貴館の御發明一より百迄世凡の類にあらざるを確信し併せて益々隆盛を奉祈候就て**腋臭必治法**の御傳授を許され度謝金は今回更に郵便爲替を以て逓送申上候間何卒至急秘傳書御回送被下度奉願上候也

廿四年一月廿七日

栃木縣安蘇郡常盤村大字牧開藏院　高橋勝藏

日本授産館長野上三省殿

貴館益御隆盛奉賀候陳去る三月中旬忽然愚書を奉り貴館御傳授の**癲癇必治法**傳習仕り日々相用させ候所其後一度も發病不仕候之に由て先頃より隔日に服用致させ居候是にても前に異ならず矢張發病不仕全く平癒の如く認定致候之れ全く貴館御傳授法の神妙不可思議なる段合掌三拜奉萬謝候右は御禮の爲め申入候也

廿三年九月廿六日

豊前國仲津郡豊津千百八十六番地　井村健彦

日本授産館御中

拜啓昨年御傳授相受候**たん病を根切にする御法**にて昨今は全く平癒仕候右御禮以書中奉謝候也早々

廿四年二月十二日

東京市下谷區坂本村廿一番地　伊藤寛

野上三省殿

本館發明各種新法の正確なる右に顯せる文意の謝狀及證明書を接手せしこと創立以來本年に至る四周年間にて已に數千通の多きに至りしも本館が嘗て一たびも之を廣告せざりしは彼の世上に多く現はるゝ投機醫士及賣藥者流の奸手段と同一視せられんことを恐れてなりし然るに世人の多き中には未だ本館發明新法の奏効有無如何を疑ふ者なきを圖られず依て斯の如き疑心者の爲めに謝狀中特に短文なる分一二を撰拔して廣告することと如斯

本日より來三月卅一日までは**創立四周年の祝意**を表する爲め特に**半額謝金**にて傳授するものなり有志者は至急傳習申込あるべし

詳細なる各種發明新法傳授科目及謝金規則書は切手二錢着せば直に郵送すべし

東京神田末廣町十番地

日本授産館

廣告

福音週報第五十號記事は條例に背けりとて發行禁止せられ候尚不日之れに代るべきものを發行して愈同事業に勉強仕るべく候間舊に由り益御愛顧を賜へ

二月廿八日　發行所

東京麹町區三番町十番地

福音週報社

定價

一冊	六錢	郵税〇五厘（但府内無郵税）
十冊	五拾八錢	郵税〇五厘（同前）
半年分	壹圓四拾六錢	府外は壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は貳圓八拾六錢

發行所

東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

發兌　每月三日、十八日、二回發兌　四月三日第五拾九號出版

定價　一冊 金五錢　十二冊(半年)金五十五錢　廿四冊(一年)金壹圓　郵稅一冊 金五厘

創業已來今日まで未だ曾て一日も延刊したることなし。

前金にあらざれば發送せず。見本は郵券六錢を要す。爲替拂渡局、本鄕郵便局。

少年園は今や天下に貳萬有餘の園友を得たり。都鄙を問はず東西を論ぜず。何れの處にか復た少年園の至らざる處あるべき。されば珊瑚机上に銀燭を剪りて貴族公子さ夜の短きを恨み、葡萄架下に竹床を與にして暇日の學生に午睡を忘れしめ、木樵る少年に負はれては險しき山路を伴ひ、蛤拾ふ乙女に抱かれては波寄する礒邊に遊び、樹蔭に憇ふ時、巖角に腰打かくる時、斧を杖にし籠にもたるゝ處、其眼を慰め、其勞れを忘れしめざるはなし。或は父母團欒せる燈火の下に出でゝは笑を催すの媒となり、或は孤坐沈思する窓の下には、高思を走せ妙想を練らしむるの師友ともなる、其少年諸子を益するの大なる、其少年諸子を娛ましむるの深き、此園友の多きを以ても知るべし。蓋し娛樂の中に裨益を與ふる事さ、圖畫(毎號挿入する)の精巧にして、有名なる寄書家に富むこと事さは、方今幾百千の雜誌中此少年園の右に出づるものはなかるべし。未だ少年園を見ざるもの何ぞ速に來りて交を結ばざる。請ふ左に草稿を寄せられたる諸名家の姓名を見て、少年園の包藏する懷裡の溫良醇正なるを知り給へ。

東京音樂學校長、伊澤修二君
忍月居士、石橋友吉君
國民之友主筆、德富猪一郎君
學堂、尾崎行雄君
文學士、和田垣謙三君
醫科大學教授、醫學士、河本重次郎君
第一高等中學校教授、高津鍬三郎君
文學士、坪内雄藏君
文科大學教授、内藤耻叟君
バチエロル、チフサイエンス、能勢榮君
理科大學教授、理學博士、矢田部良吉君
錦雞間祇候、福羽美靜君
小山正太郎君
東京新報主筆、朝比奈知泉君
紫山、北村三郎君
理學博士、箕作佳吉君
法學士、清水市太郎君
文科大學教授、物集高見君
天台道士、杉浦重剛君

農科大學教授ドクトル、石川千代松君
華族女學校長、東京學士會院會員、西村茂樹君
第一高等中學校教授、落合直文君
第一高等中學校教授、岡本監輔君
工學士、若山由五郎君
學海居士、依田百川君
高橋五郎君
女子高等師範學校長、文學博士、中村正直君
梅花道人、中西幹男君
女子師範學校教授、野口保興君
醫學士、山縣正雄君
高等師範學校教授、文學士、國府寺新作君
東京工業學校長、手島精一君
海軍教授、理學士、蘆野敬三郎君
湖處子、宮崎八百吉君
三昧道人、宮崎璋藏君
東海散士、柴四朗君
思軒、森田文藏君
天眼子、鈴木力君

理學士、池田菊苗君
天囚居士、西村時彥君
紅葉山人、尾崎德太郎君
工學士、大竹多氣君
學習院教授、文學士、嘉納治五郎君
東京學士會院會員、田中芳男君
文部次官、辻新次君
第一高等中學校教授、中村秋香君
第一高等中學校教授、井上十吉君
美妙齋、山田武太郎君
理學士、富士谷孝雄君
露伴、幸田成行君
篁村、饗庭與三郎君
海軍大佐、水路部長、肝付兼行君
理學士、三好學君
農學士、志賀重昂君
鷗外、醫學士、森林太郎君
醫學士、關塲不二彥君
文學博士、末松謙澄君

發行所　東京府下北豐島郡上駒込村十九番地　少年園

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY